会山行報告書

通算山行NO	No. 298A	報告者	加藤秀子
年 月 日	2005年4月30日～5月2日＝日本海オートルート(仮称)		
山 名 と コ ー ス	1日目＝猿倉～大雪渓～白馬岳～柳又谷～鉢ケ岳～雪倉岳避難小屋 2日目＝雪倉岳避難小屋～雪倉岳～朝日岳～黒岩山～犬ケ岳～栂海山荘 3日目＝栂海山荘～白鳥山～坂田峠～尻高山～入道山～親不知		
1日目のコースとタイム	起床4:00－猿倉発5:25－大雪渓6:20－白馬岳11:10～12:40－柳又谷源流—鉢ケ岳—雪倉岳避難小屋14:50(泊)		
体力度＝6　技術度＝4　藪漕＝ない　道標＝ない　展望度＝素晴らしい　トイレ＝猿倉・雪倉岳避難小屋はある　三角点＝多数			
久しぶりの大雪渓は厳しい上りだった			
標 高 差	上り＝猿倉1200m～白馬岳2932m＝約1732m ＝柳又谷2421m～鉢ケ岳2563m＝約142m 下り＝鉢ケ岳2563m～雪倉岳避難小屋2390m＝約173m		
参 加 者	後藤隆徳(58)・加藤秀子	2万5千図＝白馬町・白馬岳	

第1日目

ウグイスの爽やかな鳴き声で目が覚めた。快適な朝だ。寒くはないので外で煮炊きをする。猿倉の駐車場は既に満杯で、朝の段取りやら出発組やらで何か賑やかな風である。ＣＬは朝から分厚いステーキを平らげた。何時もながら頼もしい食べっぷりにほとほと感心してしまう。

さて出発。雪は猿倉荘の駐車場からたっぷりとあり、其処からシール登行だ。回り込んだ道を直登し、ズリズリと上がる。私は今回の縦走の為に、清水の舞台から飛び降りたつもりでブラックダイヤモンドのセミファツトスキー板を購入した。間際になって決断したものだからシールが間に合わず、今まで愛用していたシンテシトラーブの狭いシールを使用する。これが後に災いとなった。

出だしは好調で、スッポリと雪に埋まった道をスリスリしながら白馬尻までほぼ平坦な歩行。この辺は６月の初旬になると、雪解けに咲くシラネアオイ、キヌガサソウ、イチゲ等が咲き乱れている所だ。何組かのパーティーが白馬主稜に取り付いているのが見える。白馬尻から大雪渓の急な登りにかかる頃、陽射しがきつくなり始め、雪がグサグサ腐り始めてきた

うん？滑る。いやぁ～、滑る。シールが効かず滑るではないか。片方の足が滑ると、足は後に流れ、身体は前に倒れる。反動で両手をつくと背中のザックがス

ルーッと頭の上を通り越して前面の雪の中に突っ込む。それを元の背中に戻して起き上がるのがとても大変な作業だ。それを何回も繰り返すうちにほとほと疲れてしまい、いつの間にかＣＬとの距離が大幅に開いてしまった。板よりシールの幅が狭いとこんなにも違うものか。

おまけにもう一つ。今日は兼用靴の中敷を忘れて、空間を埋める為に靴下を２枚重ねて履いてきた。それが板が滑るたびに、靴の中で微妙によじれて足の裏に異和感があった。その日のうちに足の裏２ケ所、内側、内踝の下と、４ケ所に大きな「まめ」ができて私を苦しめた。そして滑ってはならないとストックをきつく持ったせいで？右手の人指し指の付け根と親指の先端の２ケ所にも大きな「まめ」が出来、これは直ぐに爆ぜてしまい、ストックやピッケルを握るのに痛く大変つらいものがあった。

ＣＬとは完全に離れてしまい、遅れを取り戻そうと、滑っては疲れるシール登行よりは、板を背負った方が早いと、ザックにくくりつけてつぼ足に変える。重い！重い！重いぞぉー！ゆうに２５ｋは超えるザックの重さは、こんな状態の私の身体にはこたえた。一足、一足がグサッとくる。
１０歩いてはハァハァと息を休めるような状態に、何人にも抜かれ、やっと頂上小屋に辿りついた時は、「まめ」も絶好調に出来上がり限界に達していた。

稜線で待ち受けていたＣＬは、「遅いぞ！１時間半も待った。」と渋い顔。
「まめが・・・」と言い訳する暇もなく、次の行程があるから・・・とせかされて、休みもとらず滑降準備をする。さぁ～て、今日初の滑り出しだ。
「う～ん」足の痛いも何処へやら、滑りは快適・・・と感じるから不思議だ。雪上のきれいなスロープがたまらない。これから登る鉢ケ岳を望みながら、高度をあまり下げないように柳又谷を滑り下部はトラバース。ＣＬのつけたきれいな曲線に、同じように真反対になぞる。
「お見事！」「きれい！」自分で拍手をしたいほど完璧にできたシュプールに、やっぱりセミファットにして良かった・・・と実感。このときばかりは疲れも痛みも全く感じなかった。現金なものである。
いい時は短くて・・・。あっと言う間に又地獄の登りが始まった。板をザックにつけ、稜線の最低コルを目指す。稜線には雪がなく岩屑の裸地であった。またもや遅れ始めた。しかし、もう避難小屋には１時間もすれば着くという事がわかっていたので、マイペースであわてない。一人で歩くもいいもんだ。展望はすこぶるいい。雪をまとったアルプスの連なる山々を眺めながら、この時季に、此処

まで来なければ味わえないという感激をしっかり実感した。３月に蓮華温泉から雪倉岳を登りカチカチのアイスバーンに敗退したこと等が頭をよぎる。山はいいなぁ・・・。

鉢ケ岳の上につくと雪のない稜線上の遥か眼下に雪倉の避難小屋がポツリと見えた。結局、今日の滑りは柳又谷のわずか２０分だけだったのか。ゴロゴロの石屑の道は兼用靴ではきつい。丁度ＣＬが小屋に入ったところだ。雪に埋もれていないか心配していたがもう安心だ。あとは水の心配だけだ。

小屋に着くと、若い男性が一人水を汲んでいた。ＣＬの機転でチョロチョロの雪どけを小屋にあった細パイプを利用し、水場にかえてある。さすが・・・！小屋の入り口には雪が沢山入り込んでいたが支障はなく、一段あがった板の上が今夜の寝床らしい。ヨロヨロで到着するとＣＬが迎えてくれザックを運んでくれた。靴を脱いで足をみると、「うわぁ！みごと」

直径４ｃｍもの大きな「まめ」が水をたっぷり含んで今にもはでそう。４ケ所だ。手は、爆ぜた「まめ」に血が吹いている。ＣＬは「何でこうなるんだ」と言いながら、ビバテープの大を出してくれた。

取り敢えず、同宿者と挨拶を交わし、先ずはと重くてもしっかり持ってきた焼酎で乾杯！この若者は今はトヨタ自動車に勤めているが、秋には辞めてオーストリアを自転車でまわりたいと淡々と語る。ＣＬは白馬山荘で購入した、たった１本のビールを大事そうにグビッ！　小屋のドアから、暮れかかる山の景色がまるで映画のワンシーンのように見えた。それを眺めながら今日の行程を振り返り、しみじみと「懲りないなぁ」と思う。

夜間、心配になるほどモーレツな風が吹きまくった。

【加藤・今日の反省】

＊装備はキチンとすること。

【後藤・今日の感想】

＊白馬頂上に達すると、主稜を上ったパーティーが降りてきた。速い。

＊頂上から滑れると楽しみにしていたが、雪はなかった。

＊鉢ケ岳から避難小屋手前まで滑れた。

＊雪倉避難小屋は立派で奇麗な小屋だった。

＊三国境北西面にシュプールの痕跡があった。

＊他の登山者は全く居なかった。（当たり前？）

年　月　日	第2日目＝5月1日(晴のち曇のち雨)	報告者	後藤　隆徳
2万5千図	白馬岳・黒薙温泉・小川温泉		
山　　名	報告のコース＝雪倉岳避難小屋―雪倉岳―赤男山(あかおとこやま)－朝日岳―長栂山―黒岩山―サワガニ山―犬ケ岳―栂海山荘		
今日の体力度＝6　技術度＝4　藪漕度＝0　道標＝なし　展望度＝最高　トイレ＝栂海山荘にあるが山に垂れ流し			
犬ケ岳は遥かに遠い山だった			
コースとタイム	起床3:45－出発5:20－朝日岳9:50～11:10－長栂山11:40－黒岩平12:10～40－サワガニ山14:40－犬ケ岳15:50－栂海山荘16:00(泊)		
標　高　差	主な上り:雪倉避難小屋2390m～雪倉岳2611m＝約221m 雪倉岳コル2050m～赤男山2200m＝約150m 赤男山コル2050m～朝日岳2418m＝約368m **合計＝約739m** 主な下り:雪倉岳2611m～雪倉岳コル2050＝約561m 赤男山2200m～赤男山コル2050＝約150m 朝日岳2418m～朝日岳コル2150m＝約268m 長栂山2267m～黒岩平1644m＝約623m **合計＝約1607m**		

2日目

昨夜はモーレツな風が咆哮した。小屋周辺で奇妙な音が続き気になった。夕べは「トヨタさん」と暫く会話した。彼は奄美大島出身だった。以前、私の会社にも同島の人がいた。「山下さん」と言うと、山下の性は多いと教えてくれた。

実に素朴で純粋を絵に描いたような青年だった。そんな彼ゆえ、こんな縦走を「つぼ足」で一人やるのだろう。私の自慢気の昔話をよく聞いてくれた。ちょっと喋り過ぎたかと思いつつ横になった。

朝になり風はピッタリと止んだ。不思議である。ただ、天気は昨日と違い経験的に「下り坂」を感じさせた。スキーを背負って雪倉岳を上る。今日の区間がこの白馬岳～親不知コースのポイントだった。過去の記録では、大体１２時間掛かっている。勿論、個人差はあるが当然我々もその位の「覚悟」は必要だろう。

雪倉岳は３月、ここで「死闘」を繰り広げたことが「うそ」のように穏やかだった。あの時は滑落者が出たりで、２ケ月でこんなに変わるものか、、、。頂上にはヤケに立派なピカピカの山頂標石があった。

頂上下から今日の初滑りである。まだ、早朝で雪は硬い。ガシガシと横滑りで辛く下るが、次第に快適になる。雷鳥が一羽いた。途中、大きな崖があり右に大きく迂回する。余りに急で怪我が怖く少し歩き下る。再びスキーで赤男山（あかおとこやま）コルまで快適に滑る。赤男山を上り、少し滑り、大きな大きな朝日岳に向かう。

ここの上りは厳しかった。昨日同様、加藤はかなり遅れる。頂上でシールを干したり、横になったり加藤を待つ。仮に加藤が不調の場合、縦走は厳しいだろう。その場合は蓮華温泉に下り、明日、金山沢を滑り猿倉に帰ろうと思い描いた。しかし、頂上に到着した加藤は意外にも元気だった。ここまで頑張ったのだから、後半も頑張ってやる、と力強く宣言する。頂上の方位盤で犬ケ岳を確認する。まだまだ遥か彼方だ。白鳥山は更にその向こう。日本海は見えない、、、。

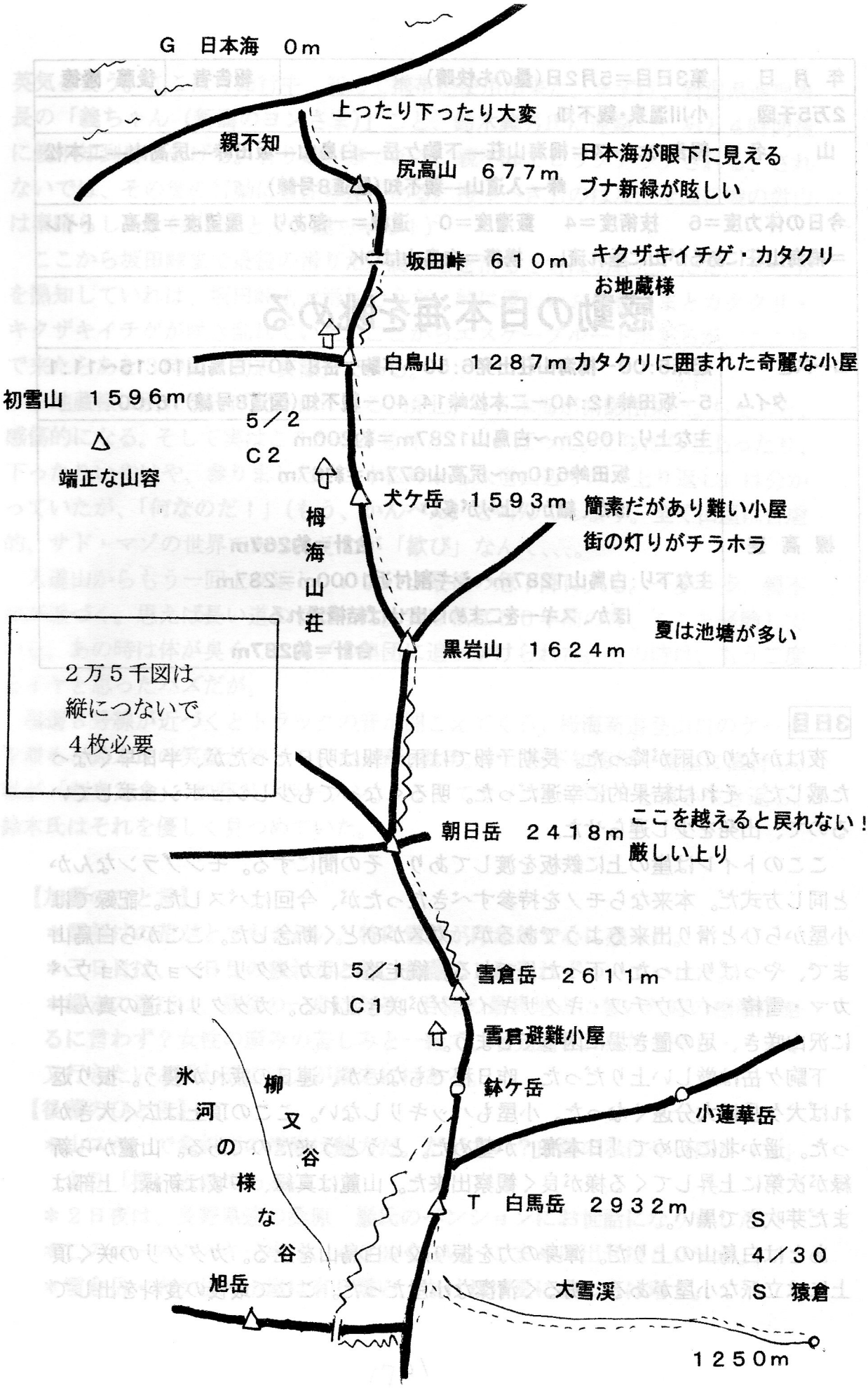
甘いものが欲しくて「おしるこ」を作り飲む。朝日岳から少し滑降を楽しみ、長栂山にシールを付けずにトラバースをする。雪が重いのでシールを使用しなくてもＯＫなのだ。

長栂山から黒岩平はかなり滑れた。もう少し気温が低ければ更に良かった。「トヨタさん」とはもうかなり差がついた。彼はこの辺で泊まると言っていた。まあ、スキーとつぼ足ではスピードが歴然としている。ここからもシールは貼らずに行けた。雪は右手の東側に多く付いている。雪が多い今年はかなり歩き易いと言えるだろう。

ここまで出発から７時間。少し疲れた。マンサクの花が疲れた体を癒してくれる。３０分休憩し英気を養う。どうも胃がスッキリしない。ラーメンを、寿司を食いたいと願望するが、叶う訳もない。再び出発。小さな上り下りが続く。左に「初雪山（１５９６ｍ）」が大きい。とても１６００ｍの山に見えない。やがて「サワガニ山」に到着。この辺りには「イワウチワ」がたくさん咲いていた。犬ケ岳までもう少しのところで、とうとう雨が降ってきた。急ぎ足で犬ケ岳に上り、栂海山荘に入った。「予定通り」１１時間だった。加藤はやや遅れる。

加藤が到着の頃には雨は本格的になる。体はバテバテ・ヘロヘロ・メロメロで何にもする気にはなれず、兎に角横になりたかった。胃が気持ち悪く、暖かいもので癒す。２時間ほど横になりやっと体は復調した。

＊栂海山荘で雨水を集めた。
＊栂海山荘のトイレは、断崖垂れ流しだった。
＊山荘の日記に、前会員の大根田、伊豆ハイクの河合のサインがあった。
＊山荘では携帯電話は入らない。


G　日本海　0m
上ったり下ったり大変
親不知
尻高山　677m
日本海が眼下に見える
ブナ新緑が眩しい
坂田峠　610m
キクザキイチゲ・カタクリ
お地蔵様
白鳥山　1287m
カタクリに囲まれた奇麗な小屋
初雪山　1596m
5／2
C2
端正な山容
犬ケ岳　1593m
簡素だがあり難い小屋
街の灯りがチラホラ
栂海山荘
夏は池塘が多い
黒岩山　1624m
2万5千図は
縦につないで
4枚必要
朝日岳　2418m
ここを越えると戻れない！
厳しい上り
5／1
C1
雪倉岳　2611m
雪倉避難小屋
鉢ケ岳
小蓮華岳
氷河の様な谷
柳又谷
T　白馬岳　2932m
S
4／30
S　猿倉
大雪渓
旭岳
1250m

年 月 日	第3日目＝5月2日(曇のち快晴)	報告者	後藤 隆徳
2万5千図	小川温泉・親不知		
山　名	報告のコース＝栂海山荘―下駒ケ岳―白鳥山―坂田峠―尻高山―二本松峠―入道山―親不知(国道8号線)		
今日の体力度＝6　技術度＝4　藪漕度＝0　道標＝一部あり　展望度＝最高　トイレ＝栂海山荘にあるが山に垂れ流し　携帯＝白鳥山はOK			
感動の日本海を眺める			
コースとタイム	起床5:00－栂海山荘出発6:50－下駒ケ岳8:40－白鳥山10:15～11:15－坂田峠12:40－二本松峠14:40－親不知(国道8号線)16:00		
標高差	主な上り:1092m～白鳥山1287m＝約200m 坂田峠610m～尻高山677m＝約67m ほか、細かい上りが多い 合計＝約267m 主な下り:白鳥山1287m～シキ割付近1000m＝287m ほか、スキーをこまめに出せば結構滑れる 合計＝約287m		

3日目

夜はかなりの雨が降った。長期予報では雨予報は明日だったが、半日早くなった感じだ。それは結果的に幸運だった。明るくなっても少しショボショボしているので、出発を少し遅らせた。

ここのトイレは崖の上に鉄板を渡してあり、その間にする。モンブランなんかと同じ方式だ。本来ならモノを持参すべきだったが、今回はパスした。記録では小屋からひと滑り出来るようであるが、ガスがひどく断念した。ここから白鳥山まで、やっぱり上ったり下ったりである。縦走路にはカタクリ・ショウジョウバカマ・雪椿・イワウチワ・キクザキイチゲが咲き乱れる。カタクリは道の真ん中に沢山咲き、足の置き場に困ってしまう。

下駒ケ岳は厳しい上りだった。昨日程でもないが、連日の疲れが襲う。振り返れば犬ケ岳は大分遠くなった。小屋もハッキリしない。ここの頂上は広く大きかった。遥か北に初めて「**日本海**」が望めた。とうとう来たのである。山麓から新緑が次第に上昇してくる様が良く観察出来た。山麓は真緑、中域は新緑、上部はまだ芽吹きで黒い。

あとは白鳥山の上りだ。渾身の力を振り絞り白鳥山を上る。カタクリの咲く頂上には立派な小屋がある。明るく清潔な小屋だった。ここで最後の食料を出して

英気を養う。ここは今山行中、初めて携帯が使用出来た。まずは、新潟県連理事長の**「義ちゃん（新潟のヨンさま）」**こと、鈴木義男氏に連絡し、あと４時間後に親不知到着を告げる。有り難い事である。親不知でピックアップされる、されないでは、その後の行動に雲泥の差がある。持つべきものは友、全国組織の労山は素晴らしい。**（ありがとう、義ちゃん！）**

ここから坂田峠まで最後の滑りだ。腐れ雪を滑ると雪は切れた。ただ、ルートを熟知していれば、坂田峠まで滑れそうだ。峠は優しいお地蔵さまとカタクリ・キクザキイチゲが咲き乱れていた。ここからエスケープルートがあるが、ここまで来たらあと３時間**「初志貫徹」**である。

お地蔵様に別れを告げ尻高山に上る。頂上から日本海が俯瞰出来た。ちょっと、感傷的になる。そして実はここからが意外とハードだった。だらだらと上ったり、下ったりいやはや、参りました。二本松峠から入道山辺りの「上り返し」は分かっていたが、**「何なのだ！」（もう、かんべん）**と叫んでしまう。全く山屋は自虐的、サド・マゾの世界である。そこが「歓び」なんて、、、。

入道山からもう一回上り返し、いよいよ最後の急下降に入る。一歩一歩、親不知が近づく。思えば長い道のりだった。実は私は３０年前の夏、ここを経験している。あの時は体が臭くて、アブの集団に追っかけられた。その時は、もう二度とイヤと思ったハズだが。

国道８号線が近づくとトラックの音が聞こえてくる。栂海新道登山口のゲートを潜ると鈴木氏の笑顔が待っていた。堅い握手。すぐ親不知海岸の食堂に直行し、私が「刺身定食」、加藤が「ラーメン」、そしてサイコーのビアを頂き生き返る。鈴木氏はそれを優しく見つめていた。

【加藤のひと言】

＊雪解けの花がとてもきれい。特に雪椿が印象的で心に残った。

＊三日目は、一日目の疲れがとれ、後藤ＣＬに遅れずついていけた。

＊縦走の喜びは、最後の一歩にある。目標の最終地点に着いた時の感激は語るに言わず？女性の産みの苦しみと一緒で、喉元過ぎれば何とやら・・・で又行きたいと思わせる魅力が縦走にはある。

【後藤のひと言】

＊山スキーで急斜面の滑降は魅力だ。だが古い？山屋の私はやっぱり「縦」より「横」志向である。

＊２日夜は、長野県連の桑原　巌氏のペンションにお世話になりました。

＊このコースのスキー率は、４０％くらい。こまめに出せば５０％か。

＊雪倉岳・犬ケ岳の小屋は有り難い。なければ更に厳しさは増す。

等高線

後藤　隆徳

朝日岳の老人

だいぶ昔の話（１９７４年のこと）だが、その年の夏、Ｏと私は白馬岳から日本海の親不知（おやしらず）に縦走した。

長いコースだが天候に恵まれ行程は順調に進んでいた。３日目は朝日岳のとある池塘（ちとう）に幕営した。すばらしい所だった。他のテントはひとつもなく、蒼く澄んだ神秘的な池にはお花畑が広がり、無数の高山植物が咲き、天上の楽園を彷彿させた。

それもそのはずである、実はこの一帯は幕営禁止だった。もちろんそれは承知していた。だが、次の幕営指定地まで今日中に着かないし、疲れた体がそうさせた。夕食を済ませアルコールも入りくつろいでいた。もう外は冷たい風が吹き始めた。

その時外で声がした。誰だろう今頃。入口を開けてみると、そこには白髪を伸ばした眼光の鋭い老人が立っていた。「老練」という言葉がピッタリの風貌だった。老人はこの辺一帯の自然保護の監視員をしているといった。そして私達に直ちにここを撤収して、キャンプ指定地に行くよう勧告し丘の向こうに姿を消した。

私は少し酔っていたこともあり、高を括り（たかをくくり）適当に受け答えた。どうせこんな年寄りはすぐ行ってしまうだろう。

私達はまた横になってウトウトした。どのくらい時間がたっただろうか。２０分、３０分、いや４０分だろうか。聞こえる音といえばあいかわらず風の音だけだった・・・。

だが何か気になった。何かヘンだった。私はおもむろに起き、テントを出て丘の向う側をそっと覗いて仰天した。そこには、先ほどの老人が眼をカッと見開き、腕組みをし、風に向かい佇立していたのだ。

私は思わず、アッと声を上げるところだった。老人のその後ろ姿は「君たちがテントを撤収するまで私はここを絶対動かない」と言っていた。

それは愚直で頑固で融通が利かない一徹な姿そのものだった。彼は高齢にもかかわらずあふれる情熱と気高い使命感をもち白馬岳周辺の自然を守っていた。

老人は若い私達に多くは語らなかったが体を張り「何か」を伝えたかったに違いない。今もあの光景はハッキリと脳裏に焼きつく。

連休はその朝日岳を再訪する。可能なら老人にもう一度会いたい。だが、それはもうかなわないだろう。しかし老人の「こころ」は今なお私のなかに鮮烈に生き続ける。

ウラシマソウ

4／9　勝河原・幕山にて

カット　来生　綾子

老人は亡くなった先代の朝日小屋主人です。
今、小屋はこの方の娘さんがやっています。

わいほう NO.17
1995.5.17 より